

アメリカにおけるライティング支援施設の現況と 日本におけるその影響

長尾 佳代子^A, 壁谷一広^A

本報告の前半では、発表者が2017年と2018年にアメリカのアリゾナ州とニューメキシコ州で視察した学修支援組織の概要について述べる。後半では、アメリカの学修支援の中で行われているライティング支援の事例紹介とアメリカのライティング支援に影響を受けた日本の大学の実践についての視察報告を行う。

今回報告する内容は、アメリカの学修支援に関して、日本の学修支援に関しても、その一端に過ぎない。限られた情報ではあるが、これを報告、共有して、日本の高等教育におけるライティング支援のあり方について、ともに考える一助としたい。

1. 最近のアメリカの学修支援の概要 (壁谷)

1.1 アメリカで視察した学修支援組織の実態

アリゾナ州の視察はフェニックスおよびツーソンで、ニューメキシコ州の視察はアルバカーキで実施した。視察したのは、フェニックス5ヶ所、ツーソン3ヶ所、アルバカーキ3ヶ所である。教育機関の内訳は、4年制大学が3校(アリゾナの1校では2つの学修支援組織を視察)、コミュニティカレッジが7校だった。

これらの学修支援組織は、それぞれの学生のニーズに応じた独自の学修支援を提供している。さまざまな取り組みの視察とその関係者への聞き取りから、全体的には次の共通点が見られた。

- (1) 学修支援の提供は基本的にプロフェッショナルチューターあるいはピアチューターが行う。
- (2) チューターに最低賃金を下回らない報酬を提供するとともに、定期的なトレーニングを実施する。
- (3) 予約不要の一時利用に時間制限を設ける。
4年制大学には、次の共通点が見られた。
- (4) 指名/予約制のチュータリングは有料で提供する。
- (5) 学生のニーズや実態に合った様々なサービス(出張チュータリングや個人カルテの色分け管理など)を提供する。

(6) アスリート学生についてはNCAAの学修適格性の規程を優先する。

コミュニティカレッジには、次の共通点が見られた。

- (7) 基礎学力強化が学修支援の中心である。
- (8) 地域内の学修支援組織間の連携があり、共通のシステムを導入している。
- (9) 教員が直接関わることもある。

1.2 アメリカの研究者・実践者の見方

アトウェルら(2014)¹⁾は、リメディアル教育プログラムを修了した学生の卒業率は低くなく、リメディアル教育が高等教育で教育の質を保つ機能を果たしていると述べている。また、2017年にツーソンで面談したCRLAの元会長ドロシー・ビッグスは、リメディアル教育にとどまらず、より多くの学生に様々な学修支援を提供し、その成果をデータで示し続けることによって、学修支援センターが認められるようになると述べていた。

2. アメリカのライティング指導の事例 (長尾)

2.1 三単現のsからMLA, APAまで

ライティングは学修支援組織、あるいはその中にさらに設置されているライティングセンターで指導される。ライティングのプログラムには共通の項目が見られる。

たとえば、ゲートウェイコミュニティカレッジのラーニングセンターでは、名詞、代名詞、形容詞などの品詞の見分け方、現在形、進行形、過去形や過去分詞形といった動詞の使い分け方、コロンやセミコロンなどの符号の使い方などを指導している。発表者が見学した際には、MLAとAPAについての講義を行っていた。ライティング指導の内容には基本的な文法の学習から論文の書き方の習得までもが含まれている。このことは、学修支援組織の連携グループであるマリコーパコミュニティカレッジ群に所属するコミュニティカレッ

A: 大阪体育大学体育学部 教養教育センター

ジに共通する。また、その学習内容はアリゾナ大学の支援組織においても共通であり、さらに言えば、eラーニング (OWL: Online Writing Lab) の内容とも基本的に同じである。その到達点は MLA と APA が区別できて、これらに沿って論文が書けるようになることである。筆者が「なぜ MLA と APA なのか」と尋ねると、チューターは笑いながら「どちらかが出来ればもう一方は出来るはずだから、二つやる必要はないわよね」と述べていた。

2.2 ライティングセンターにおける添削指導

プログラム化したライティング指導とは別に、書いた作文の添削指導も行われている。アリゾナ大学の学修支援施設「シンクタンク」では、ライティングセンターや数学センターは別室になっており、そこで学生はリラックスした雰囲気ですべての添削指導も受けていた。学修支援施設におけるチュータリングはカウンセリングのように時間を決めて行っている例が多いが、作文添削指導では、時間に制限を設けずに実施している例も見られた。

3. 日本の大学におけるライティング支援

3.1 早稲田大学への輸入

アメリカにおける学修支援組織におけるライティング支援のやり方を日本に輸入した実例がある。早稲田大学では、2004年に国際教養学部を開設した際にライティングセンターを設置した。同学部では共通言語を英語とし、留学生も多く受け入れている。佐渡島紗織教授は自身がイリノイ大学の博士課程に留学していた時に利用していたライティングセンターをモデルにこの組織を構築した (佐渡島, 2013, iii) ²⁾。「文を良くするのではなく、書き手を良くする」 (North, 1984, 438) ³⁾ことを目指すのが支援の特徴である。これは1980年代に普及した the writing-as-a-process のスローガンの視点を共有するものである。また、留学生が日本語で書くための支援や日本人学生が英語で書くための支援だけでなく、日本人学生が母語である日本語で書くための支援にこの観点を取り入れている点も早稲田大学の取り組みの特徴であると言える。

3.2 愛知淑徳大学での展開

愛知淑徳大学では2000年から2005年頃に学内で学

生の日本語運用能力低下が話題となった。そこで、各学部にライティング科目が設置され、2008年に文学部の教員たちが主体となってこれを全学共通科目に改組した。さらに、2014年には「初年次教育部門」が設置され、これがライティングサポートデスクを運営している。設立者の外山敦子教授は早稲田大学のライティングセンターをモデルとしながらも、これまでの経緯や大学の状況にあわせた独自のやり方で運営している。

4. 考察

4.1 アメリカ型学修支援の日本の高等教育への応用 (壁谷)

アメリカ型学習支援の取り組みを日本の高等教育に反映させるには、次の点を考慮する必要がある。

- (1) チューター・トレーニング・プログラムと評価基準の開発
- (2) コミュニティカレッジ型をベースにした学習支援体制の確立
- (3) 学生への学習支援・サービスの一元化

4.2 「教えない」指導法について (長尾)

一般に、アメリカの学修支援におけるチュータリングでは、teaching ではなく coaching を行うことを強調する。だが、リメディアル教育としてのライティング支援では文法や論文執筆フォーマットの理解習得のために teaching がさかんに行われていた。実は、「教えない」指導法はその言語の運用能力をある程度以上備えた学生において有効なものではないだろうか。現場に立つ教員たちはそれを経験的に知っているため、知識注入型の指導法もある程度取り入れながら学修支援を行っているのではないかと考えられる。

引用・参考文献

- 1) Attewell, P. A., Lavin, D. E., Domina, T., & Levey, T. (2006). New Evidence on College Remediation. *Journal of Higher Education*, 77(5), 886-924.
- 2) 佐渡島紗織. (2013). 文章チュータリングの理念と実践: 早稲田大学ライティング・センターでの取り組み. ひつじ書房.
- 3) North, S. M. (1984). The idea of writing center. *College English*, 46(5), 433-446.

本研究は JSPS 科研費 17K01163 の助成を受けたものである。